

天声人語

ひとりカヤックで朝の海をめぐる。ワシやクジラ、クマの親子と出合う。苔むした倒木に触れて森の神秘を知る——。写真家星野道夫さんの「森へ」は詩情あふれる旅行記である。彼の文章と写真是近年、小中高校の教科書に数多く載っている▼ヒグマに襲われて亡くなつてから20年。巡回展「星野道夫の旅」がきょう横浜で始まる。先日、京都の会場を訪れると20、30代らしき姿が多かった。「教科書で夫の作品と出会つたと言つ方が多くて励されます」と妻の星野直子さん(46)▼たとえば高校の教科書にある隨想「水の惑星」。氷河の話す声を聴き、森の呼吸に耳を澄ます。壮大な写真とあいまつて読む者を氷河の奥へいざなう▼星野さんをアラスカに導いたのは、東京の古書店で買った写真集だ。先住民の村を空からとらえた米写真家の1枚に魅せられる。名も知らぬ村長に慣れない英文で手紙をしたためた。「写真集で村を見た。訪ねたい」。初めて旅したのは19歳だった。43歳で急逝するまでアラスカを撮り続けた▼彼の作品に人生を突き動かされた若者は何人もいる。直子さんは昨秋、アラスカで日本人留学生から「星野さんの写真を見て、こちらの大学で野生動物の管理を学んでいる」と言われたという▼崩れ落ちる氷河、命うごめく原生林。生と死の循環を描く写真を見ていると、人間の存在がはかなく感じられる。自然の一部にとけこもうとした写真家の作品は、次世代の胸の奥にたしかな響きを残し続けるだろう。

2016・10・19